

宮城 社会

## <もう一度会いたい> 罪悪感深まるばかり

### ◎ (4) 自分責め続ける母

「早めに帰って来るんだよ」なんて言わなければ良かった。

今野ひとみさん(45) = 石巻市 = は悔いてばかりいる。震災で3人の子を失った。

### <約束あだに>

長女の麻里さん = 当時(18) = は震災の日、地元の体育館に出掛けた。同級生とバドミントンをする約束をしている。

高3で卒業目前。大崎市の短大への進学が決まり、最後の高校生活をエンジョイしていた。

「遊んでばかりいては駄目だよ。早く帰って進学の準備でもしなさい」

ひとみさんは朝、そう言い聞かせて娘を送り出した。

麻里さんは母の言い付けを守った。

バドミントンを昼で切り上げ、バスで帰宅した。それを見計らうかのように津波が襲い、帰らぬ人となる。

そのまま体育館にいたら命を落とさずに済んだ。

バスは本数が少ない。1本逃すと帰りが遅れると早い便に飛び乗ったといい、それがあだになった。

津波が1日遅かったら。

その日、次女の理加さん = 当時(16) = も家にいた。高2から高3に上がる時。入試期間で在校生は休みだった。

次の日の午後ケーキ屋さんでアルバイトの面接を受ける予定だった。

ケーキ屋さんには津波は届かなかった。津波が1日ずれたら死は避けられた。

理加さんは吹奏楽部に入っていた。担当はサクソ。ひとみさんは勤めがあって演奏会を見たことがない。こんなことになるなら無理しても仕事を休めば良かった。

### <尽きぬ後悔>

何で厚手のジャンパーを買ってあげたのだろう。

長男大輔君 = 当時(12) = は遺体で見つかった時、中綿入りのジャンパーを着ていた。

前年の誕生日祝いに「しまむら」で買った。寒がりだから厚いのがいい。本人も「かっこいい」と気に入っていた。

ジャンパーは水を吸って重くなっていた。濡れないようにするのを邪魔したかもしれない。

波に流されて生き残った1学年下の男の子から「大ちゃんのジャンパーをつかんで引っ張ったが、重くて動かなかった」と後で聞かされ、罪悪感が深まった。

自分を責め続けている。追い込み過ぎて気が変になりそうだ。

不意にあらぬことまで考える。

この子たちを生みさえしなければ。

この家に嫁がなかったら。

悔悟の念は入り込んでいけない領域に踏み込んでいた。



仏壇に手を合わせるひとみさん。自責の念に駆られ続けている

拡大写真